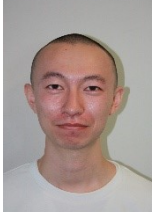


真言密教からみた利他的行動研究の現状と課題



AH13008 岩上 大真
指導教員 岩倉 成志

1. はじめに

現在用いられている人の行動選択モデルは、自分の利益を最大にするような経済学の消費者行動理論が基となっている。交通計画の分野では、この理論を活用したロジットモデルを用いて効用関数を設定し、効用最大化理論を使って分析を行っている。このように、人は個人の効用が最大となるように行動することが人の行動選択の基本的な考え方である。

しかし、我々は普段の生活において自分の事だけでなく、協力、支援、思いやりといった他者にとっても利益となるような「利他的」な部分も持って行動している。この人間の「利他性」については、今から約 200 年前にフランスの社会学者 August Comte が「利他主義」を提唱して以来、経済学のみならず心理学、社会学、進化生物学などの様々な学問分野で研究が進められてきた。もともと「利他」という言葉は仏教用語であり、その起源は学問的研究が始まる遥か以前の仏教の始祖である釈迦が生まれた紀元前 5 世紀頃まで遡る。「利他」として長い歴史の中で、学問における「利他性」は我々の利他行動を反映しているのであらうか。新たな視点の「利他性」により、あるべき社会の姿が見えてくるのではないかと私は考える。

そこで本研究では、日本で本格的に仏教が普及し始めた約 1200 年前の平安時代、弘法大師「空海」によって説かれた「真言密教の利他」という立場から、学問的「利他性」に関する研究の現状と課題について分析することを目的とする。

2. 真言密教の利他性

2. 1. 「即身成仏」と「三密行」

真言密教とは「即身成仏」「三密行」の教えをもとに弘法大師「空海」が開いた真言宗の思想のことである。

「即身成仏」とは“この身このままで生きたまま成仏する”という意味で、“成仏するには途方もない時間を要する”従前の仏教の考え方ではない新たな考え方であることが大きな特徴である。

また、「三密行」とは「即身成仏」するための具体的な行を指しており“口でお経を唱え、手で合掌をし、心

で仏を感じる”といった 3 つの行為を同時に行うことを指す。このように、いかなる人でも「三密行」を行えば「即身成仏」できるという教えが真言密教の根本的な思想である。

2. 2. 真言密教の利他性

では、この研究テーマである「真言密教からみた利他的行動」とはどういったものであるのか。これを考えるにあたっては、真言密教の中心となる仏である大日如来と、我々との「一即多」「多即一」の関係性を理解しなければならない。

そもそも大日如来とは真理そのものを指し、即ち大宇宙に遍満する無限のエネルギーのことである。姿・形としては現れていない大日如来に我々は「三密行」を行い「即身成仏」する。つまり、我々一人一人は即ち大宇宙の無限のエネルギーの一つであり、同時に大宇宙の無限のエネルギーの一つが我々一人一人となる。そして、自分と他者は全く違う存在ではなく、元々一つの集合体（大日如来）であり、よって他者の為に行動することは、同一の存在である自分への行動となり、あらゆる他者に対して行う利他行動が必然のこととなる。この考えを宇宙の森羅万象との関係性まで拡張したのが真言密教の利他である。

現代におけるこの利他行動の例としては、全く自分とは関係のない他者に対して行動する「電車に乗る際に席を譲る」とか「震災時のボランティア活動」等が挙げられる。この“自分の幸せは他人の幸せ、他人の幸せは自分の幸せ”といった行動規範が“自分で行っている利他的行動が自利（利己的行動）として内包されている”考え方に基づいているのが「真言密教からみた利他的行動」である。

2. 3. 本研究における利他性の定義

本研究では利他性を“自分で行っている利他的行動が自利（利己的行動）として内包されている”とする真言密教の利他性として定義をし、現在研究されている利他的行動と比較してみた時、どのように当てはまるのかという現状を検証し、現代の課題を捉えていく。

3. 効用関数による学問的利他性の良説例

経済学を中心とした分野においては、効用関数を用いて人の行動を表現している。効用関数に利他的要素が組み込まれている数多くの研究のうち真言密教の利他性に近い研究例を以下に示す。

(1) 良説例1：社会全体への利他性の考慮

寺本 (2013) の研究では個人と他者の消費、個人の所得水準を組み込んだ効用関数の中で、個人の所得水準や他人の稼得を変化させた時、当該個人の行動をどう表現できるかを分析している。

$$\text{個人の効用関数 } U(x, b + y, M) = U(x, Y, M) \quad (1)$$

$$\text{当該個人の消費 } x \quad (2)$$

$$\text{他人の消費 } Y = b + y \quad (3)$$

$$\text{当該個人の所得水準 } M = x + y \quad (4)$$

b : 他人が自ら稼得したこと等による消費部分

y : 当該の個人が贈与したことによる消費部分

そして、社会一般への寄付を考慮するため (1) 式を拡張したのが (5) 式である。

$$U(x, b + y, M) + u(z) \quad (5)$$

$u(z)$: 個人が社会一般へ z ほど給付することによって得られる効用 u

(1) 式では身近な他人への利他行動を表現していたが、(5) 式は $u(z)$ を組み込み、社会一般の他人への利他行動として表現できるようになっている。この式は個人と他者間の損得のみの利他行動を表現している点が課題ではあるが、身近な他者とは限らない社会一般の他者への利他行動を表現している点で真言密教の利他性と類似している。

(2) 良説例2：自己犠牲の利他性を表す効用関数

集団内の個人淘汰と集団間の集団淘汰の2つによる階層淘汰論に基づく進化心理シミュレーションを用いて、羽鳥ら (2008) は地域コミュニティの集団内における少数の利他的行動の創発を検証している。

以下の式は、ある集団 g における個人の利得 u と集団の利得 U を表している。(A, D は各個人の遺伝子)

$$\text{利他的個人 } u_i^A = -c + ia \quad (6)$$

$$\text{利己的個人 } u_m^D = ia \quad (7)$$

$$\text{集団の利得 } U_g = \sum_{i \in N_g} u_i^s = i(Na - c) \quad (8)$$

c : 利他的個人が一生で抛出する費用

i : 集団内利他的個人の数

a : (利他的個人の c の支出によって) 集団内全員にもたらす利益

N : 集団内全員の人数 ($Na > c > a$ とする)

条件より利他的個人式 (6) を単体で見ると費用 c を

抛出することによって集団全体に a の利得をもたらすが、個人としては不利益を被る構造となっている。従って自己犠牲的な仏教の利他性に近い利他行動がこの式に反映されていると考えられる。それに比べて式 (7) の利己的個人は利益をただ享受するだけの構造を取っている。この数理モデルは、利他的個人と利己的個人の2つの式に分けてから集団の利得を考えている点で、利他的行動が利己的行動を内包していると捉える真言密教の利他性とは異なる構造を取っている。

4. 利他性を含んだモデル式の現状

代表例で示した他にも、経済学や心理学、進化生物学等で研究されている多くのモデル式は、個人と他者間における利得、消費等の定量的な要素によって利他性を当てはめている。このような、経済学上で表現が可能な一部の利他しか表現されていないことが、利他性を含んだモデル式の現状として窺うことが出来る。また、一つの効用関数に自己と他者の変数が組み込まれているモデルは存在したが、両者を同一とみなすようなモデルは確認できなかった。

5. 学問的「利他性」の現状

佐々木 (2011) によれば、そもそも仏教における「利他」は小乗仏教では「後世の指導」、大乘仏教では「自己犠牲」といった異なる意味として存在している。その中で、学問的な意味の「利他」は大乘仏教による、「自己犠牲を伴う利他」として発展してきた。

そして、荒木 (2012)、梶原ら (2014)、山田 (1980) によれば“人間は元々利己的であり、その上で生じる問題を解決するために利他性が発生する”として、“利己的行動が利他として内包されている”とする真言密教の利他性とは反対の考え方が進化生物学の研究の発展により現代において一般的となっている。よって、自己と他者を同一と考えた上での利他行動が自利 (利己) として内包されている真言密教の利他性と類似する研究は確認できなかった。

6. おわりに

これらの真言密教の利他と学問的な利他とを比較すると、「自己犠牲」を伴うことに関しては組み込まれているが、他者に対して自分と同一とみなすか、それとも異なる存在であるとみなすかにより相違が生じていることが確認できた。よって、従来のモデルに自己と他者を同一とみなす効用関数を組み込み、利他的行動の集合が利己的行動となるような「新たな利他性」によるモデルを用いて人の行動を表現し、将来の規範的な社会のあり方を研究していく事が今後の課題である。